

## 服 装 史 よ り

——流行の変遷を裏付けるもの——

山 本 登 美 子

歴史は繰返されると言う言葉がある。大変有名な言葉だが、実際に歴史が繰返されるのかと言えば、そうではない。歴史の、ある概念的な様相だけが繰返し、同じ様に現われるだけであつて、歴史的事実とか、あるいはその原因などと言うものは決して繰返されるものではない。例えば、古代から二〇世紀に至るまで私達人類は、戦争と言う出来事に数多く遭遇して来た。戦争と言うものの悲惨な結果を知り乍らどうしてもさける事が出来なく、結果的には「歴史が繰返された」訳である。しかし、トロイの戦役と太平洋戦争は同じであつたかと言えば決してそうではない。原因も、結果も、そして方法も手段も異なるものであつた。

勿論、服飾の歴史も、この例からもれるものではない。私達が過去に見て来た幾つかのシルエットの、或る基本的な型を、角型であるとか、或は円型であるとか、と、言う具合に描出してみると、なるほど同じ形のもの

幾度となく繰返されている事になる。しかし、同じ角型、同じ丸型にしても、その求められた動機とか社会的風潮と言うものが全く異なるものであつたし、また、角型と言つたところで全てが同じ角型であつたと言うものでもなかつた。

こう言つた意味から歴史を説く場合、原因と結果と言う、二つの、全く異つた立場が私達にあたえられる。流行と言う全く気まぐれな手足を持つ服飾史にあつては、しかし、何時の場合にも結果論的な形を取らざるを得なくなつてしまふ。何故なら、社会的な思潮の動行が要求するもの、それが純粹に社会的な思潮の反映であるとはかぎらないからであり、また、社会の動きとは別に、流行と言うものは、全く不意に、思いもつかぬ形態を生み、それが歴史の一頁として定着してゆくからである。勿論、服飾の全てが社会の動勢に同行しないものであると言うのではない。以前に（研究論集第四卷第二号）説いた様に、おおむね服飾の歴史は社会の動きに敏感であつた。しかし、そうした自然発生的な形態と言うものよりも、むしろ、人為的な、人間の欲望そのものの投影された、全く自由な誕生を持つ形態と言うものに、現在では多くの眼が集められているのだ。（研究論集「服飾と流行」参照）。

第四卷第二号では、デイオールのリーニュ・フェウゾウ（紡鐘ライン）までの服飾の動きを、社会状況と言うものとの対比のうちに綴つて来たが、ここではその後の変遷を、或る意味では前著とは全く異つた仕方であつて思ふ。

一九五八年の傾向を考える前に、特筆しなければならないことは、第二次大戦後、ニューロックと呼ばれるロングスカートでセンセイションを起し、それ以来、つねに世界の服飾界の第一線に立つて、リードを保つて来たクリスチャン・ディオールの死の事である。一般にディオールといえば、例のアルファベット・ラインと言うことの外は、「あまり識られていない様であるが、過去十年間、ジャアナリスティックな活動のかけに於いても、「服の裏面工作」「衿ぐりの多彩な変化」「セパレート」「アンサンブル型式」「新しい色の発表」などの、きわめて地味な、アルチザンとしての業績をも遺している。

ディオールの死去と言う事件は、或る意味で現代的な服飾史の実体を立証するために、まことに倅せな出来事であつたと言つてもよい。ここ数年の間、私たちは、ディオールの作品のつながりが、すなわち服飾の歴史そのものではないかと言う錯覚にとらわれて来たものだが、この天才的な流行児が死んでみると、服飾史を綴り続けて来た選手は、実はディオールではなくジャアナリズムではなかつたかと言う思いにつき当る。何故なら、ディオールの死を見た服飾界が、瞬時昏迷におちいるのではないかと言う私達の予想をうらぎつて、服飾の歴史は、依然として、これ迄と同様何の変化もなく綴られているし、それに加えて、或る社会的な力が、すでにディオールのあとに来るものを、いち早く推挙しようとしているからである。「或る社会的な力」と言う様な抽象的な物言いを止そう。それは、あきらかにジャアナリズムと言うものである。一つの王国での国王の死と言う出来事は、その国の歴史にとつて重大な意味を持つものであるが、それは、国王が国家の統治にあづかるところが大であるからだ。私たちは、或る時には、ディオールの死によつて服飾の歴史が一時中断されるのではないかと言う

様にまで、ディオールの権威と言うものを信じて来たのであつたが、実は、服飾の世界にあつて、彼は国王はおろか総裁ほどの力をも持つていなかつたのである。妙な事だが、私達は、ジャアナリズムの力と言うものを、身にしみて感じ、その力のために常に支配されて来た事を、百も承知であつたのだが、この現代の不思議な神話を知らずしらず信じて来てしまつたのである。そう言つた意味から、服飾界が唯一人で以つてその流行の源泉を代表させると言う事は邪道であるはずである。唯一人の作品を流行の軌道にのせると言う事に、私達はあまりにも慣れすぎて来て、服飾界の歴史的事実と言うものが、もつと広い立場のものであり、もつと多角的であると言う事を忘れてしまつていたのである。ディオールが死んでみると、そうした事が完全に明るみに出されてしまつた。一人の流行児のプロフィールを、あまりにも信じすぎてしまつていたのである。そう言つた意味で彼亡き後の服飾界の様相については興味深いものがある。

一九五八年の春は、ディオールの後に来るものとして、彼の後継者としての二十二才のサンローランが当然の様子に頭をあらわし、その外に、ピエール・カルダン、ギイ・ラローシュなど、若いデザイナーの活躍が目覚ましくなつた。この年の基調は、その殆んどがローブ・サックに置かれたものである。

この変型は三つのシルエツトに分けることが出来、その一つは、リニューゴンフレと呼ばれるもので、後がふくらんで、横から見ると斧の型をしたカルダンの示した傾向。二図の典型的なシュミーズ・ライン。三図のハイウエストで裾拡がりになつたベビー・ドール型でマギー・ルフの発表したもの。これと同じ傾向でサンローランのトラペーズ・ラインがある。

一図 リニュー・ゴンフレ



二図 シュミーズ・ライン



三図 ベビー・ドール



四図 トラペーズ・ライン



これらローブ・サックは、一九二〇年の、チューブラー型に見られるウエストラインの解放であり、短いスカート丈の復活である。その自由さに、全世界の女性から、圧倒的な人気をもつて迎えられ、「ウエスト・ラインの無視は女性美を失うもの」と言う意見や、「シユミーズドレスは作つても売れないだろう」と言う既製服業者側の観測を破つて、この春は、世界中がローブ・サック旋風に巻き込まれた形であつた。

しかしこれら一九五八年春に発表された、いわゆるサック・ドレスの群型を見ていて、私に第一番に感じられる事は、このきわめて単純な原型には、何一つとして服飾的な創造のあとが見えないと言う事である。服飾的な

創造を追いまわし、あるいはひねりまわした結果、こうした単純な「型」そのものに至りついたのであるかも知れないのだが、考えてみれば、これまでに発表された作品と言うものには、もつと明らかな、確実なタッチで服飾意図と言うものが示されていた様であった。

しかし、ここでは、もつと素直にこのサックドレスを服飾の歴史的事実であると信じてゆこうと思う。何故なら、服飾とは永久に変わる事のない人体と言う帰着点にもとずいて形作られる外形のあり方と言うものであり、たとえ、どんな形が生れようとも創造と言うものには変りないものであるからである。

服飾史と言うものを、細かく、丹念に書きたてて行つた場合、しかし、私達は、もつと奇妙な形態に、幾度も出逢うに違いないのだが、この様に、意味もなく、理由もなく、生物学上の突然変異の様な形で事実の現われて来ると言う事が、服飾史の特異性と言うものである。

妙に、こじれた推論になるが、この、サックドレスのデザイナーを初めに行つたデザイナー達は、社会的要求とか、歴史の趨勢とか言うものから全く自由で、殆んど空想的にコンテを動かしたのであると思われる。一つの形を、今迄とは異つた姿で作り出さなければならぬと言う使命が、デザイナー達をゆり動かし、無理にも一つのものを作らせたのである。服飾の歴史と言うものは、或る時には、この様に綴られるのだ。服飾の歴史だけではなく、創造にまつわる殆んど歴史は、全く予測を裏切り、全く突然書き変えられてゆく。

歴史と言うものは、何時の場合にも、次に来るものが先の時代を批判し、是正してゆくものである。十八世紀を批判して十九世紀が生れ、二十世紀は、さらにその十九世紀を批判して成り立つ。サック・ドレスの一群から

トラペース・ラインの生れた事は、そのもつともよい例であろう。サック・ドレスと言う基本的な形が、適度に批判され、良き意味での服飾的裝飾性が加味されて、このトラペーズ・ラインが生まれたと考えられてよいのだ。

一九五八年の秋から、この、あまりにもデッサンでありすぎた形、つまり、サック・ラインが、ようやく肉付けされ始める。一枚の白紙に、落書きが、あるいは寄書きが始められる様に、サック・ラインを中心に、ウエストの明示が始まる。十年に一度と言われるモード革命のあつた次のシーズンであるだけに、先のサック・シルエットの感じがすてがたく、それをどう変化するかと言う段階になつて、まづ、ゆるい帯を胸の下あたりに結ぶ。それがきつくなるとサック・ドレスではなくなってくる。これがエンパイヤ調と言われるこの秋のシルエットであつた。夫々のデザイナー達がいづれも体にびつたり合せないと云う共通点をもつて、ハイウエストを大きくクローズ・アップさせている事があげられる。

サンローランのカーヴライン。矢張り全体的な傾向であるハイウエストは彼も採用した。イタリア十六世紀の建築からヒントを得たアーチ型のまるい肩線、バストを強調し、ヒップ・ヘムにかけてやわらかな曲線を流し、裾ですばまつた様な形で、優雅に、単純に作られている。またこの春来日したカルダンは、キノコ・ラインを発売し一応成功をみた様である。全体のシルエットを、西洋きのこに型どり、ヒップのあたりにゆとりをもたせたストレート型。彼の作品には、殆んど、ベルト・サッシュを胸高にしめ、ウエストの位置を暗示又は強調している。その他、前は高目のウエスト線を後に流し、背中にゆるみをとつてふくらませた「Kライン」（ジャンパツ

一)。交叉した切替線を扱った、「ミスX」(ジャンデセー)。「リーニュ・シゾー」はさみ型(カルヴァン)などが紹介され、個々の特性を発表している。概して、文字通り、ずんどうのサック・ドレスは一応シルエットの上から影をひそめたとと言える。そこには、ベルトによつて、又ロマンチックなりボンによつてさえぎられたからである。蝶結びにしたボウを胸高につけ、釦の扱いとしたり、ジャケットの裾に、ボーダー風に扱い、その立体的な効果を美しく現わした傾向は最も新鮮なアイデアであつた。

その他、目立つたところでは、抜衣紋に大きなカラーや、ヴェストの丈、スカートの丈は短く、帽子は上に高く、髪型はフワフワと全体にふくれ上り、丁度日本髪を押しつぶした様な傾向である。

ゆつたり削つた衿元に大きなカラーは、我々一般人に消化されはじめ、シヨール風のカラーがとりあげられた。シュミーズ・ラインから発展し、全体をルーズな線でまとめたハイウエストのスカート、その不安定なウエストの位置を支える短いジャケット。大きな髪型にヘアバンドは、低調なこの秋に印象に残るものであつた。

五図 カーブ・ライン



六図 キノコ・ライン





七図 K・ライン



八図 リーニュ・シゾー



一九五八年の秋に、まず感じられた事は、従来の服飾の動きと異り、一選手の暴走は見られず、幾人かが幾様かの作品を発表し、それがそのまま社会に広く発表されたと言う事である。言葉を変えれば、かつては、何かの力が、一選手をマークさせていたと言う事である。一人の芸術家が、その世代を風靡すると言う出来事はあり得るが、しかし、それだけが芸術の世界ではない。芸術家の眼と言うものはもつと多様で、なお、一人をしてその時代を代表させると言う事など、到底出来ない事なのである。

一九五九年春には、ナチュラル・シルエットが発表された。つまり、ニュークラシックとも言われ、自然で素直な線が持たれ、従来のサロンの、造型性が排除されたのである。まず、シルエットにふれてみると、第一にあげられる事は、ウエスト・ラインの位置が久し振りに正常に戻つて来たことである。しかし、ウエスト・ラインの復帰と言つても、急に、胴にびつたりするものではなく、やや、ハイウエストの名残りをとどめ、高い位置でルーズフィットとしたものや、ウエストの上下に巾の広い切替布をつけて暗示したもの、又、広いベルトで締めたドレスは、トップをブラウス風にたるませたもの等である。即ちその扱いは様々で、ベルトで現わされた

り、何かの部分服飾でマークし、新鮮味を持たせる工夫が、色々考えられている。総体的な特徴としては、衿あきが広く、肩巾も丸みをもつてやや広く、胸はわづかなふくらみをみせている。袖はラ格蘭、きものスリーブの他に、セット・イン・スリーブが目立つて多くなり、やさしい女らしさを表現する為に、やや高めに扱つたもの、わづかにドロップしたもの、或は、袖山にタック、ダーツをとつたものなど、様々なニュアンスをもたせて扱われている。ツーピースにあたえている変化としては、ルーズ・フィットが多く、スカート丈はやや長めで、落ち付きのある長さを示している。ウエストがマークされはじめると、ベルトにアクセントが求められる様にな

九図 ベルテッド・スーツ



十図 ブラウジングドレス



十一図 タックスリーブ



十二図 セミラ格蘭



るのも当然の動きで、久しく影をひそめていた皮のベルトが、ブラウジングの傾向とともに復活して来た。ワンピースはもとより、ツーピースにもベルトを扱うものが多くみられ、スポーティな為には敬遠されつづけてきた皮ベルトは、こうしてウエストの強いアクセントとして、使用されて来たのである。

ここに於いて、服飾の動きの主流から外れるが、このベルトの流行を論旨から除く事は出来ない。と言うのは、単なるベルトなら従来にも見られ、物新しい問題ではないのだが、ベルトの上に、装飾性えの傾向が顕著に見られると言う事である。ベルトの素材となるべきものに、革や布と言った古い形のものだけではなく、種々の化学製品が生まれたと言う事も見のがせないが、とにかく、服飾のデコラティヴえの傾向がきわだつて暗示されはじめたのだ。装飾性えの傾きと言う事は、一つには従来えの反動であり、そして、造型意慾の現われでもある。又、ここでは、ディオールと言う核心を失つた服飾界の、群雄割拠的な動きの反映でもあるのだ。

また、前シーズンで、久し振りに、誇張のない自然なシルエットもどつたパリーモードも、一九五九年秋冬から、一九六〇年にかけてのシーズンを迎えてみると、それ程大きな変化はみられなかつた。が、最初に婦人の話題をさらつたのは、ロングか、ショートか、と、言うスカート丈の問題だつた。ディオールを除いて、全クーチュリエの作品が総じて五種前後長めになつている中で、サンローランだけがひととき短く、ものによつてはヒザ小僧丸出しと言う短い丈を発表し、ここに賛否こもごものスカート論議が行われたわけである。いづれにしても、たいしたことはないが、パリーモードと言えば、世界の服飾界が「右えならえ」するだけに、軽く見過すわけにもいかないと言うことだつたのである。

では、新しい一九六〇年の女性はどんなテクニクで表現されるであろうか、全体を通じての大きな特徴をあげてみる。

デザインのポイントが肩巾に集中され、丸味のある広い肩巾の表現が全作品を一貫して流れているテーマとなっている。この為袖が落ち、深いアーム・ホールがこれを助長する役割を果している。ウエストラインは、自然の位置から腰骨にかけて下つてきた傾向が、全体に強く出ている。もう一つウエストでの話題は、ウエストラインを否定する組と、はつきり強調しているデザイナー、又、中間派と、相変らずウエストも今シーズンの焦点である。スーツのジャケット丈は長く、プレスレット・レングス（腕輪する位置まで）、リスト・レングス（手首までの丈）、フィンガーテップ・レングス（指先までの丈）などである。即ち、四分の三丈・八分の七丈といったチューニック風のスーツが盛んに使われている。

全作品を通じて、一口に言える事は、シルエットをぐつとひきのばすと言うアイデアにつきるもので、殆んどデザイナーが、これを基調として中であつて、サンローランのみが公然と戦をいどんだ形をとつている。即ち、多くの店が同調している長いジャケット。長めのスカートに、真向から反対し、「リーニュ・ソワ・サント」つまり『ライン60』と名づけて発表した。そのシルエットは、ボレロの様に極端に短いジャケット、歩けば膝がみえる程度の短いスカート。又、「ライン60」の色としては、赤と黒、緑と黒、と言う様な強くきわだつた二色の配合が目立つて多い。

かくしてロングスカートがはやる？、ショートスカートの流行？と、スカート丈からはじまる今シーズンの

モードも、一選手の暴走はなく、開幕された。

十三図 ライン60



十四図 チューニック・スーツ



話は異なるが、今度、帝国ホテルの旧館が取毀しになると言う話である。経営者側に言わせると、営業を主体とするホテルとしては、経営が成立しないからだそうである。実用物の歴史は、たいていこの様な事から塗り変えられてゆくものだが、早い話、服飾にしたところで同じ事が言えるであろう。服飾には、耐用年数などと言う問題はないが、結果的には建造物と同じ様な事が言える。古くなると、洋服も着られなくなる。ひどい言い方をすれば、古くなると、持主は着たがらなくなる。

古くなると言う事には二つの意味があつて、一つは質的に古くなり、布地がいたんで使用に耐えなくなる事であり、もう一つは、そう言う事とは別に、時間的に古くなると言う事である。後者を言い換えれば、流行に立ちおかれて、使用に耐えないと言う事だ。

服飾と言う問題は、建造物などと異なり、特に短期間を対象とするものである。昔はそうでなくとも、現在で

は、流行と言うものを追つてゆくならば、正確には一シーズンの使用にしか耐えないであろう。こうした服飾の、特にその様な面ばかりを覗いてゆくと、合目的々な変形をとげる。或る真面目な歴史の跡が眼につくと言うより、ほとんど意味のない、あるいは完全に意味のない落書きの世界がしばしば見出されるものだ。

はじめに、私は、サック・ラインについてあまりよく言わなかつたが、それはサック・ラインそのものの、存在的な形態が悪いと言う意味のものではなかつた。街に見られるものの全てが、きわめて抽象化され、単純なフォルムに還元されつつある現在では、サック・ラインと言うものは、あまりにもサロニズムに傾倒した服飾界にあつては、一種のカンフルであつた事には相異なる。また、夏と言う暑いシーズンを背景にして、きわめて合理的であり、用布が最少限度まで切りつめられたと言う事も、またきわめて経済的であつたはずである。しかし、経済的であり合理的である事によつて失われた世界もある。万能の神は、欠点の多い人間よりもなお魅力のないものなのだ。

サック・ラインを批判したのは、同じ抽象化されたものにしても、何故もつと美意識志と言うものの背景に立つてコンテが動かされなかつたかと言う気持からであつた。勿論、デザイナーに完全に美意識がなかつたかと言うとそうではない。出来上つた作品には、完全な美意識そのものより、むしろ落書き的な線が嗅出されたと言う事である。余談のついでに言つておくが服飾界が単調であると言う理由から、あまりにも過去との断絶のげい、一種奇抜なものを思いつく必要はないのだ。帝国ホテルの話が出たので、これもついでに、フランク・ロイド・ライトの言葉を引用して置こう。論旨からされるが、しかし、含蓄のある言葉である。

「文明と文化とは似たようで全く非なるものなのだ。アメリカには文明はある。しかし、悲しいかな文化がない。次々に生まれる新型の自動車・テレビ等々、これらがアメリカの文明。しかし、古い国々にはみなそれぞれ文化がある。例えば日本、着物を例にあげてみよう。日本人は美しい手を持つている。肩の線もなだらからで美しい。顔も勿論。しかし足だけはあまり見せたがらなかつた。脚に自信もなかつた。そこで着物は足だけを見させてその上を包み、その代りきれいな模様を散らした。その逆に手の方は大きく袖口を開き、そのたもとを、これまた蝶の羽の様に美しく飾つた。その上に彼女達は美しい手をますます美しく見せる諸動作までも身につけた。そして脚もまた美しさを想像せしめる存在になつたのだ。これが文化である。ひるがえつてアメリカの女性を見よう。彼女達は足に自信があつた。何とか脚をきれいに表現しようと考えた。その場合、ただ脚を露出させてしまつた。つまり、ショート・パンツ。胸も背中もまた然り。彼女達は自らの叡智を傾ける事なく、簡単にその結果を思いついた。原始の人間の考えに逆戻りしているわけである。これが文化と言えらうか？ 文明がわれわれに必要な事は勿論の事、しかし文化はそれ以上に貴い美しいものなのだ。」

余談が長くなつたが、とにかく、歴史と言うものの或る断面を覗いてみると、まことに奇妙な幕間狂言が多いものだ。人間と言うものは、時間と言うものに対して、何か一つの問題を提示し、またそれを否定してゆかなければ、どうにも生きてゆけない代物なのである。

ここで取りあげる事の出来たのは、ごく短いこころ、二年の現象にすぎなかつたが、通じて考えられる事は、服飾の主だつた傾向がデコラティブ、それも、プチブル的なデコラティブの方向にあると言う事である。ウエス

トが反省され、ネックラインが指摘され、次いで袖がデザインされ始めるが、そのデザインするコンテの中には、きわめてプチブル的なデコラティブえの欲望がうかがわれる。そうした事を助長させる様にベルトの型、あるいは色彩と言うものも豊富になつた。ストッキングも然り、珍らしく色彩を帯びて作られる様になつた。やがて、あらゆるアクセサリーや、あるいは刺繍の糸なども種類を増し、きわだつては目立たないが、全てに渡つて裝飾が着実に完備されてゆくのではないだろうか。終りにあたつて、私の独りよがりな絵を描く結果になるが、現在の服飾の動きは、サック・ラインに始まり、それが徐々に肉付され、或る落ち付きのある形に成長し、やがて形が動かなくなるとアクセサリーや帽子、あるいは下着等の関心が高まり、そしてはじめて次の時代え動き始めるのではないかと考えられる。